



2019.06 No.01

TAKE FREE

ご自由にお持ちください。

はじまる、はじまり



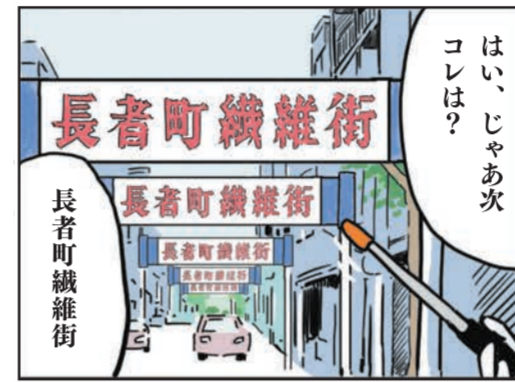
長者町おじさん
豊島徳三

錦二丁目で長年、大手繊維商社を経営。奈びす祭りなどのまちのイベントでは「長者町おじさん」として盛り上げ役をかってくれている、このまちの有名人

錦二丁目
エアーマネジメント株式会社 社長
名畑 恵

学生時代から錦二丁目のまちづくりに携わって15年目。2018年3月に、まちの人たちと錦二丁目エアーマネジメント株式会社を立ち上げた。

いつもどこかで何かはじまっている。
そんな町の力強い鼓動が伝わるように。
生き生きとした内容をお届けしてまいります！



長者町の、とある喫茶店を舞台に、そこに集まる噂話と噂話が大好きな人々を描いた日常 コメディ。

登場人物



店長
喫茶店「リュムール」の店長。自分が町の噂になっていないかいつも気にしているが、全く噂になっていない。



たき
喫茶店「リュムール」で働く噂話に敏感な大学生。マイペースで、店長をいつも振り回している。

作者



佐藤 ぶらお
埼玉在住のデザイナー・イラストレーター。大学時代を愛知で過ごしました。長者町の入道にちよっとも楽しんでいただけると嬉しいです。よろしくお願ひします。
<https://twitter.com/buraaosato>

「オトナの絵本カフェ」(5/15/10/1)を開催しました。大人こそ絵本を読んでほしいなあ、という小さなつぶやきから始まった「オトナの絵本カフェ」イベント。5回目の今回は、「はじまり」をテーマにした絵本をみなさんをお迎えしました。「オトナの絵本カフェ」は、毎回「延藤文庫」からテーマに沿った絵本をみなさんにご紹介しています。毎回「テーマを伺う」から話し合いますが、それがまた面白いので、なんとかテーマが決まっても新たな発見をし、それをお互いに紹介しあうので、これまた、なかなかセレクトが進みません。いつもこんな風に準備をしていましたが、今回のテーマは「はじまり」です。今年、年々開催していたオトナの絵本カフェですが、1年半ぶり、少し間が空いてしまったのは、私たちが絵本の魅力をたくさん教えたいから、企画メンバーでもあった延藤先生との別れがあったからです。あれから1年、延藤先生の好きだった言葉「おわりははじまり」そして春は「はじまり」の季節。だから、今回はなんとテーマが決まりました。久しぶりに開催したにもかかわらず、たくさんの方が絵本と絵本カフェのゆるい雰囲気を楽しんでいただけただろうで、次回も楽しみにしています。という嬉しい言葉もいただきました。次回は、更に開催予定、ぜひ遊びに来てください。

延藤文庫 紹介 No.01 「はじまり」の絵本

錦二丁目のまちづくりに絶大な貢献をされ、全国的にも著名であった故 延藤安弘先生の(都市研究家・地域プランナー)蔵書(絵本含む)や研究資料が「延藤文庫」として、このまちに保管されています。冊数にして5万冊以上。日本におけるすまい・まち育て研究・実践の発展のため、ライブラリー化に向けて現在基金募集中です！
基金の申し込みはコチラ

ART FARMing / アート・ファームing

アート・ファームingとは、まちを農園に見立て、まちのなかを舞台に展開していくアートプロジェクトです。農家の人が毎日手入れをしておいしい作物を育てるように、まちに集まるみんなと一緒に手作りしていく農業のような農業でないアート。集まってきたみんなが出したアイデアをみんなで育てる。アートな実験的な作品がまちに設置されたり、いろんなアイデアをとりあえずやってみる！「長者町芸農試験場」など、まちを舞台に緩やかに自主的に起こっていく出来事を、包容力ある長者町で実践させていただきます。一緒に参加してみませんか？

EXHIBITION SEASON
2019.7.27sat - 10.14.mon

詳しくはコチラから▶
<https://artfarming.jp/>

長者町ファームingクラブ

アート・ファームingのプロジェクトをベースにしながら作品を制作したり、進行状況を共有したり、アートプロジェクトの実践に参加することができます。一緒にアート・ファームingを楽しみませんか？

参加はコチラから!

10/12/13 10:00-16:30

北 MARUNOUCHI MARCÉ

令和も19回

長者町えびす祭り

Follow me! Facebook Instagram

KAISYO00000 【カイショー】 No.01

発行日 2019年6月10日

企画 KAISYO00000編集部 (錦二丁目エアーマネジメント株式会社内)

編集・文 谷 亜由子 森田 結志 (錦二丁目エアーマネジメント株式会社)

ディレクション・デザイン 浅井 梨紗 (kapsel)

撮影 浅井 雅弘

印刷会社 株式会社日経名古屋製作センター

発行 錦二丁目エアーマネジメント株式会社 〒460-0003 名古屋市中区錦2-13-1 宮本ビル MAIL kaisyooooo@gmail.com

次号発行予定 2019年10月 「 まちは劇場 」 (6月より年4回発行予定)

錦二丁目。

古くは名古屋城の城下町として、昭和の時代には繊維問屋街として栄えたまち。それぞれの時代で、それぞれの志を胸に、夢をかたちにした人たちがいます。そんなみなさんに「はじまる」をキーワードに、まちへの想い、これからのまちに期待することなどをお聞きしました。

阿部 充朗 MITTS COFFEE STAND
黒田 義隆・黒田 杏子 ON READING
大島 恵之 長者町 割烹まるぜん
森下 薫 moca moca
森下 敬司・山川 紋 STUDIO UNBUILT



店主 阿部 充朗 Abe Mitsuaki

MITTS COFFEE STAND ミッツ コーヒー スタンド
平日 7-19時 土/日/祝 8-18時
錦2 8-15 錦三輪ビル 1F
定休日 / 不定休

錦二丁目は僕にとつての「始まり」の場所 関わるものたちの意志で町をつくっていく決意



今年の7月でオープン7年を迎えます。オープン前の春くらいからこの場所に目星をつけていて、同じ時期に僕を含め10件くらいの応募があったらしいです。そしてここに決めたのかと聞かれることも多いんですけど、正直なところ決め手は家賃がこつて少し変わった形をしているんですよね。ちよつと使いづらい形だったのと、当時と今ではこの

エリアの物件の相場の感覚も違っていたし、思ったよりも安く借りられたんですよ。結局、10件の応募者の中から僕が貸してもらえることになったんですけど、実は抽選でなく大家さんが選んでくれたらしいです。それを後で聞いてすごく嬉しかったですね。

僕にとってこの町はまさに始まりの場所。春日井市出身なんですけど、もし名古屋で自分の店を持つなら何となく中区がいいな、というのがあるって、この町も昔から中区でしか働いたことがなかったです。土地勘もあつて馴染みのある町という感覚があつたので、幼い頃から長者町には思い出もいろいろあるんですよ。僕の祖父がちょつと面白い人で、若い時は憲兵。その後は日本郵政に勤めていて、ずつと公的機関でしか働いたことがなかった人。そのせいか、商売をする人に憧れていたみたいなんですね。それで退職後に勝手に「水野商店」という架空の会社の社長を名乗って、会員登録まで作つた長者町の問題さんに買って来ていたんです。買いつけなくてもいいから僕とMITSUの店に溶け込めたいのは、こちらから積極的に動いたというよりも、この町に外から来たものを受け入れる度量があつたからだと思います。僕自身、来る者は拒まずの姿勢ではいたんですけど、やはりそれだけではこうはいかない。双方の思いがあつてこそですね。

高校生活になって初めて一人でカフェに入ったもの町20年近く前かな、当時えびすビルにあったTシャツプリントの店にTシャツを作りに来たついでに、隣にあったカフェに入つてみたのはいけれど、お金がなくてメニューの中に頼めるものがほとんどない。お腹は空いているのに一番安いビュッフェとか、そんなものを注文

して仕方なく一人でそれを食べた思い出があります。振り返れば自分にとって何かと縁のある町だったのかもかもしれません。社会人になり、いろいろなお店で働きたり、いつかは自分の店を持ちたいと思つていました。やるんだつたらオフィス街で働く人たちにコーヒーを飲んでもらえらるお店がいいな、と朝の出勤前、昼の休憩時間、仕事帰り、そんなひとときにかつらりと寄つてもらえるようなお店、それもあつてオフィス街を選んだというのがあります。お店を開く前には独自の市場リサーチもしました。長者町にある喫茶店の椅子に座つて何時にどれだけお客さんが来るかをカウントしたり。町には喫茶店がたくさんあつて、しかもお客さんはほとんど来るのでこれは行ける！と思ひました。

開店後は自然と長者町や錦二丁目の様々な取り組みに関わらせてもらうことが増えて行くんですが、店を始めた頃の僕は本当にただの「コーヒー馬鹿」で、町のことを考えるとかそんな視野も余裕もなかったです。僕とMITSUの店に溶け込めたいのは、こちらから積極的に動いたというよりも、この町に外から来たものを受け入れる度量があつたからだと思います。僕自身、来る者は拒まずの姿勢ではいたんですけど、やはりそれだけではこうはいかない。双方の思いがあつてこそですね。

MITTS COFFEE STAND の姉妹店

To Go Kurumamichi
名古屋 車道のマフィンとサンドイッチと、ちょこっとコーヒーのお店です。
10-19時 / 水
東区筒井3丁目18-21 メゾリエ車道1F
adedge (アデッジ)
8-20時 / 無休
港区港明2丁目3番2号 高屋書店 1F (ららぽーと名古屋みなとアルクス)



長者町おじさん 豊島 徳三
錦二丁目エリアマネジメント株式会社 社長 名畑 恵
自分の町に誇りを持って発信すること。目指すべきは「高級御用聞き」。

対談

長：古い人間だから、そういうことにはこだわってしまうんだね。しかし、長者町もかつて栄えた繊維関係の会社がいまや半分から三分の一ほどに減ってきている。いつまでも問屋街ということに固執しているのは良くないね。町の人が、特に若い世代の人たちがこれからどういう方向に向けてやっていくのかは大変気になります。まずね、町には目玉が必要ですよ。例えば大須、円頓寺、そして兜王山と、それぞれ町の賑わいを見ていると共通しているのはみんな門前町。大須観音があり、円頓寺があり、日泰寺、弘法様がある。長者町にもお聖天様、福正院があるの、目玉にはできないのいいね。あそこが神様、何だか知ってる？

名：その間はどこらに？
長：ロサンゼルスに赴任していったんです。しかし日本との時差の関係で午前中は仕事がなく暇でね。遊んでいるわけにもいかないからジパンとTシャツに着替えて、綿花の倉庫に入ってフットクリフトを動かしたりしてた。社長なのにそんなことするのは僕だけだ(笑)。僕は英語も話せなかったけれど、いわゆる「労働者階級」と言われるような女、黒人、ハワイやメキシコ、韓国から来ているような現地の人たちと一緒に泳いでた。昼になれば同じようにコートやハンバーガーを頬張りながら働いていた。するとね、言葉はなくてもお互いに気持ちを通じ合えるんだよ。アメリカではそういう体験をたくさんしましたね。

名：かっこいい！会社を運営するうえで、そういう以心伝心は大切だと思いませんか？
長：いいんだよ、御用聞きで、でもね、サバをくださいと注文されて、とにかくどんなサバでも売ってあげたいというわけじゃない。今日はこんな生きのいい

長者町おじさん(以下、長)：そもそも繊維商社の豊島はね、名古屋でなく一宮で創業した会社なんですよ。
名：そつなですか？
長：ええ。しかし、豊島ビルのあるこの場所は豊島家にとっては名古屋で最初の土地。まさにここが名古屋での始まりの地と言えるね。創業は1841年、天保12年。大正時代に「豊島家」がこの土地を買い、名古屋に出て来た。
名：そつなだったんですね。長者町おじさんの町への熱い思いは、そういう歴史が背景にあるからなんですか？

名：でも先日、まちづくりに関するある会議に参加した時、名古屋で一番目那衆)が多いのは長者町だね。って行政の方に言われた。長者町おじさんはじめ、まちづくり協議会の方も、町のために自分のお金を出して関わってくれている。そういう人がいるとただでいい町だと言われました。ところで、長者町おじさんはご出身も一宮ですか？
長：そう。出身はね。しかし昭和30年に豊島に入社して55年勤めたら長者町で時間が長い。途中で6年半ほど抜けてはいるけれどもね。

名：大切だと思うが、今の時代は難しいね。昔と違ってみんなメールでやり取りする時代になってしまった。けれどもどんな時代になつてもやっぱり人間同士が直接話し合う、コミュニケーションをとるの大事なこと。かつて人事をやっていることがあるがね、それまで毎年せいぜい6~7人しか採用していなかったところを、僕の担当になっていきなり45年(20人、46年には30人と一気に採用したことがあつた。将来を見据えて、これから製品の仕様が揃えば労働力の確保が重要になると思つたのですね。それまでは地元の人を中心に採つていたのを、他県の大学の研究室で顕微鏡ばかり覗いていた人とか、北海道でトロール船に乗っていたような人も、とにかく何でも来い！という感じで採用した。結果的に当時入った人たちのほとんどが役職を持ち、5~6年前まで長く勤めてくれたよ。

対談を振り返って
何度となく通ってきた長者町おじさんの執務室ですが、今回は緊張していました。自分が経営者の立場になったからか、圧倒的、という印象です。経営者として辣腕をふるってこられた豊島さんへ、自らを「長者町おじさん」と称したまちへの思いと遊び心はめちゃくちゃかっこいい！遊びながら遊びの教養を高め、納得のいかない事があれば断固として戦い、まちのために金と知恵を惜しみなく使、「目那衆」そのものの経営者の姿です。そんな姿に近づけるのは難しいですが、「おもてなしの心」は忘れてはいけないね、というアドバイスが響いています。「不易流行」。変えてはいけない「心」を、新しい変化に対応できる「しなやかさ」をもつた現代版の目那衆になりたいですね。あ、女性の場合は何というのでしょうか？(笑)

その進む先、目指すところの難しさはたくさんあると思います。ビルが増えることも悪いことではないけど、人の顔、人との関わりが見えない建物ばかりになつてはほしくない。「人の声」が聞こえる町であつてほしい。やるんだつたらオフィス街で働く人たちにコーヒーを飲んでもらえらるお店がいいな、と朝の出勤前、昼の休憩時間、仕事帰り、そんなひとときにかつらりと寄つてもらえるようなお店、それもあつてオフィス街を選んだというのがあります。お店を開く前には独自の市場リサーチもしました。長者町にある喫茶店の椅子に座つて何時にどれだけお客さんが来るかをカウントしたり。町には喫茶店がたくさんあつて、しかもお客さんはほとんど来るのでこれは行ける！と思ひました。

二丁目の夕日

No.01

「新しい元号は令和です」



文・挿絵
ぎやらり壺中天
服部 清人

菅官房長官が掲げた新元号の「令和」という言葉を誰が考案したのかは正式には発表されていない。(国文学者の中西進さんが認めたようですが...)しかし、あの文字を揮毫した人物は翌日の新聞などで報道され、内閣府職員の高修身さんは一躍時の人となった。彼は私の一年上の先輩。毎日書に明け暮れるという妙な学生時代を共に過ごした。あれから四十年近い時が流れ、彼はこれまでにきつと何十万枚という反古を重ねてきたはず。今回の「令和」も立派な筆跡だったが、そのことをわざわざ誉めたりするためにこの話題を持ち出したわけではない。一連の平成から令和への騒動の中で私自身の中でも小さな変化があったのだ。

話は飛ぶが、志村喬が演じる市役所の課長が余命宣告を受けた後に自分で書くことは何かをさがして残り時間を町の小さな公園の建設に奔走する姿を描いた黒澤明の映画『生きる』のように、私も馬蹄を重ねた証として何を遺せるのかというところをいろいろ考えてしまうことが多くなっていた。そこへ飛び込んできたのが、先輩の名筆ある揮毫の二文字だった。大きな事業や発明や資産は遺せないが、家族であったり、教え子であったり、有形無形の社会貢献であったり、そんなささやかだけれど、つまり自分がやってきたことの結果としてこれだということも、そういうものなら少しは何かを遺せるかもしれないという想いがよぎった。茂住さんはよい仕事をしたな、というよりはよいチャンスを与えられてよかったな、としみじみ感慨がわいてきた。彼の人生の一区切りとして、とても意味あるものとなつたのは間違いない。とてもわかりやすく彼のこれまでの取り組みはあの二文字に集約された訳だ。もっと大塚家には彼はあの二文字を書くためにこれまで生きてきたといつてもいい。

何度テレビ画面に映し出される「令和」の二文字を眺ながらこれまで過ごしてきた昭和と平成の二つの時代を思い返し、そして令和の時代に何ができるのかを改めて考えていた。

「ふらりと揺れ志村喬の唄響く 清人

N2 - DASHBOARD

2018年の春に立ち上がり、秋には晴れやかにお披露目となった「錦二丁目エリアマネジメント株式会社」。この町をステージに、さまざまな人のさまざまな「はじまり」を応援する会社としてのあり方や目標、これらに向けての決意などをたくさんのおみなさんにお伝えし、チャレンジの第一歩を踏み出しました。

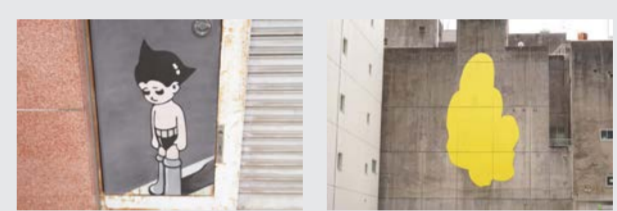


撮影: Megumi Nabata



まちぐるみ
だからできること

かつて織維問屋街として知られた長者町・錦二丁目地区は、今は名古屋有数のオフィス街でありながらも、ここ数十年で小さな隙間を生かした古本屋やカフェ、アトリエやギャラリー、映画館などができ、新たな文化が根付きつつあります。



そんな変化の裏には、まちな人たちの努力があります。アートのサポートや空ビルの改修、あびす祭り、都市の木質化など、まちぐるみの多彩なアクションで、全国から注目を集めています。



2018年11月14日「錦二丁目エリアマネジメント株式会社」のお披露目会が行われました。これまでのまちづくりの延長上につくられたこの会社には、沢山の関心が寄せられ、100名以上の人たちが集まりました。当日は、織維問屋ビル(堀田商事)の空きスペースが、パーティ会場に様変わりし、熱気を帯びた空間になりました。会場を彩ったのは、「錦二丁目発」の食事です。「長者町バクチ」「瓦パロ」。「路麵えんば」。「割烹まるぜん」。「Le Port du Gard Yukiinou Tsukidate」。コーディネートしたのは、2012年に同エリア内に開店してからすっかり「まちの若手」として定着している「MULTISOFFICE STAND」の阿部さんです。会場づくりからすべてがまの新たな文化の担い手となっている若手たちとまちな人たちの共作。「長者町が好きな人」という若者が増えたのが、何よりの成果。地道な取り組みを続けてきたよかったです。まちな長老もしみじみと語っていました。

撮影: あいせわけい

長者町おじさんモノ語り

長者町おじさん。こと豊島徳三さんがロサンゼルス駐在時代にひとつひとつ集めた秘蔵のおもちゃコレクション。アメリカでの思い出とともに、たからものたちのストーリーをご紹介します。



祖父
三代目 半七

ブリキ製のビュイック

自分でもいつあるのか把握できていないんです。この他にまだ自宅にもあるのですね。ひとつふたつ無くなって気づかないかもしれない(笑)。今回は最初ということで、まずはコレクション第一号を。アメリカの往年の名車「ビュイック」のブリキ製の模型です。80年代初め、ロサンゼルスに駐在していて、週末になると社員たちとよく徹夜麻雀をやっていたんです。僕はまあまあ勝率が良かった。でも勝ち放しもなんだし、記念に何か形のあるものを残していこうと思ったのがコレクションのきっかけです。そしてある時、たまたま訪れたアンティークショップで所狭しと並んだたくさんものの中から、ふと目に留まったのがこれ。それから麻雀に勝つたび、一つ一つ増えていきました。ここにあるのはみんな、その頃に楽しんだ麻雀の戦利品というわけです。

そもそも好きなものを集めたいと思ったのは祖父の影響なんです。僕が子供の頃、祖父は非常に厳しい人でいつも怖い顔で叱られた思い出がありま

せん。そんな祖父が昭和の初め、60歳になったのを機に、息子、つまり私の父にすべてを譲って突然引退してしまつた。そしてその時代にはまだ珍しかった世界一周旅行に出かけてしまつたんです。やがてたくさんのお土産を持って帰国した祖父は、世界の国々で買集めたたくさんの民芸品や置物を、庭の真ん中に建てた洋館に飾っていました。それがすごく印象的ですね。自分もいつか同じように好きなものを集めてみたいという思いを抱くようになりました。祖父は残念ながら私が大学生のころに亡くなってしまいました。孫には厳しかったけれど、地元では名士として活躍し、人望の厚い人でした。豪快に生きた姿に憧れてもいたし、尊敬もしていました。できればもう少し長く生きていて欲しかったね。大人になった自分と大人同士としていろいろ話をしたかった。それだけが心残りだなあ。コレクションを眺めながら、今でもふと祖父のことを思い出したりしますよ。



<会社概要>

名称: 錦二丁目エリアマネジメント株式会社
 愛称: 会所 (カイショ)
 所在地: 名古屋市中区錦二丁目13-1 (2018年現在)
 設立: 2018年3月
 資本金: 100万円
 代表取締役社長: 名相 恵
 取締役: 滝一之、坪井俊和、堀田勝彦、森田祐生
 株主: 一般社団法人錦二丁目まち発展機構

7番街区再開発地区におけるまちの拠点運営 コミュニティの場づくりとその運営によりひとやまちをつなぎます	公共空間の活用と維持管理 道路をはじめとした公共空間を活かすまちの賑わいを生み出します
既存空間のリノベーション支援事業 暮らしやアート、しごと作りを含む古いビルの活用をお手伝いします	コミュニティ支援事業 町内会や組合と協力し、安全で経済的なまちのコミュニティを支えます

はじめます
はじまりを
応援する会社

いろいろなはじまりを生み出すプロジェクトの展開

「錦二丁目エリアマネジメント株式会社」では、現在4つの分野でプロジェクトを企画中です。その1つが、3年後に開業が予定されている「錦二丁目7番街区再開発事業」でのまちの拠点運営です。暮らしの人のための足元で、暮らしの場を始める場所の足元で、このまちの暮らしや仕事、憩いや遊び、学びを生み出す場の運営を行います。また、道路をはじめとした公共空間や、地区の中にもまだまだたくさんある古いビルを、多くの方に使っていただくための取り組み、そしてまちのセキュリティやエネルギー、コミュニティを応援する取り組みも企画しています。

でも、動きはまだはじまったばかり。たくさんアイデアがありますが、どれもこれもまだまだどんなかたちで、誰と一緒に、どんな仕組みでやるのか、考えている最中です。「あんなことやろよよ」「こんなことできるよ」「一緒にこんなチャレンジをしよう」一緒に何かをはじめたいひと、団体、会社の皆様のお声がけを期待しています。